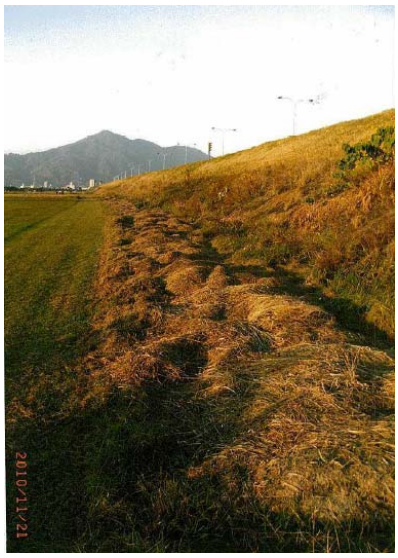
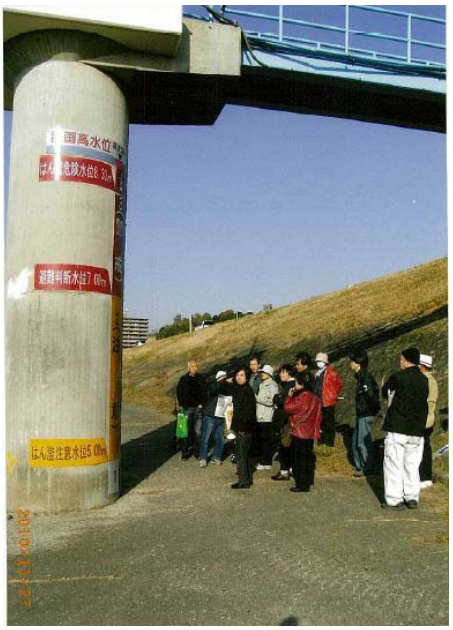
平成22年　11月分

大芝出張所管内	福間　さん
観察月日	連　絡　事　項　等
11月10日	夕方にかけて10㌔から11.4㌔ポイント区間の河川敷を散策した。その間で、ごみに関した二つの現象に目が留まった。 一つは、10㌔ポイントの河川敷に刈り取った雑草が野積みされ、放置状態にされていることだ。堤防下の河川敷隅に4,50㌢ほどの高さで、約200㍍に渡って帯状になっていた。そばの河川敷に生えていた雑草を刈ったものであることは容易に判断がつく。しかも、枯れ具合いから見て、かなりの期間、放置され続いていたようだ。 これまで、こうした長い間、放置されたままの光景はあまり見たことがない。ごみの帯である。 二つめは、11.4㌔ポイント。矢口川水門で河川敷が途切れた場所の堤防斜面に、ごみ袋数個が置かれている。この日は普段より袋の数は多めだったが、ごみはきちっと袋に詰められており、どうやら放置されたものではなさそうだ。 袋詰めは、見るたびに数も形も違うので、処分されていることは確かなようだ。「こんな場所がごみ収集場所でもないだろう」と思えるのだが、不可解である。散歩で通りかかった人にたずねても、はっきりとした答えはなかった。ただ、なかに「散歩中の人が散歩のついでにごみ拾いしてこの場所においている」という人がいた。 しかもこの場所は、かなりの期間に渡って収集、処分が繰り返されているようで、雑草が剥げて土が顔を出していた。私も以前、散歩途中に袋を提げてごみを拾って歩いている人を見かけてことはある。そういった奇特な人たちが繰り返す場所だとすれば、なんと素晴らしいことだろう。この場所の存在がどういうものなのか、ぜひ知りたい興味に駆られている。 後日、犬を散歩させている人から枯草の野積みのことで情報をもらった。その人は近くに住む男性Nさん（65）。Nさんは自分の草刈り機を持って河川敷の雑草を刈っている人で、取材対象として以前から関心があった。 Nさんの雑草刈りは概に7、8年前から続いているという。春から秋にかけての日曜、祝日に刈っている、と告白してくれた。「河川敷を散歩する人が歩き易いように」との理由。自主的な行動である。そのNさんが野積みの雑草を見て、「私が刈る雑草は細かく砕くので、こうした状態にはならない。これは根本から刈っている」という。 「人から聞いた話」と続けるNさんは、財政の引き締めで国土交通省が河川敷の雑草刈をしなくなった。河川敷を利用する人たちに任せている。そのため刈られた草は処分されないのだ。堤防の草刈りはきちっとしても、河川敷は軽視されている、と言う。刈り取られた雑草はさらに川岸の雑木の根元付近に放置の状態にあるのを、私も目撃した。 善意のごみ拾いの一方でNさんの話しは考えさせられた。枯草は腐って土地に帰るから放置しても構わない、という考えもあるかもしれない。だが、いつもきれいな河川敷を見ている者にとってはやはり「ごみの山」にしか見えない。

	【写真説明】 ①河川敷に野積みされた刈り取られた雑草の山  ②河川敷で拾い集めたごみの入った袋は「河川愛護」の結晶なのか
11月14日	広島市安佐北区の口田学区町内連合会が14日、大規模な自主防災訓練を実施した。役員の一人として参加した私の目で、訓練の一端を追ってみた。 訓練の会場となった口田小校庭には消化器、土のう作り、避難用緊急担架づくり等の体験コーナーが設けられた。約200人の町民が参加した集団避難行動、情報収集、救援、食料物資など各班の災害マニアルの確認にも積極的に取り組んだ。 なかでも、広島市、国土交通省太田川河川事務所、安佐北消防署など関係機関と地元住民が同じテーブルについて様々な対処法を検討し合う「図上訓練」に目を奪われた。 この地区は今年の7月豪雨で住宅など27棟が床上、床下浸水した大きな災害に遭った。その原因も太田川・矢口川水門との関わりが問題になっただけに、それぞれの立場で問題点を出し合うなど真剣な議論が交わされた。特に浸水被害地区の町内会長は訓練の席上で「町内会で対処法を議論した結果、新たに『避難誘導班』を独自で設けた」と教訓を踏まえた成果を強調していた。 平成17年の集中豪雨でも、この地区は浸水被害に遭っている。それだけに、矢口川水門は早急な改善を求める住民の声は高まっている。「図上訓練」の機会をとらえて、住民が太田川河川事務所や関係機関の幹部職員らと顔を突き合わせて話し合ったことは新鮮で貴重だった。防災意識を高める有意義な場になった。

	【写真説明】 ③「図上訓練」の場で、話し合う住民と関係機関の代表ら
11月27日	口田学区町内連合会が太田川に関連して行ったもう一つの行事を紹介したい。同連合会の各種団体・公衆衛生推進協議会主催の環境講座が開かれた際、太田川の「矢口水位観測所」を見学した。 観測所は矢口川水門（11.6㌔ポイント）そばの河川に建てられた巨大コンクリート製円筒の塔である。塔には大きな字で1㍍刻みの目盛が書かれている。河川の増水状況がこの目盛りで判断できるようになっている。「はん濫注意水位5㍍」「避難判断水位7㍍」「はん濫危険水位8.3㍍」などが書かれている。平成17年9月の大水害の際の記録も書き加えられている。 案内役は地元の郷土史家で、同協議会副会長のNさん。今年の7月豪雨で床上・床下浸水の被害を受けた下矢口地区を流れる矢口川の歴史も詳しく語ってもらった。 「過去にさかのぼってみても水害との闘いだったことが歴史が証明している」とNさんは熱く話した。矢口川のはん濫の歴史は本当に興味深く聴けた。 「水害の歴史を学び、改めて地域を考える機会にしよう」と開いた今回の講座には学区住民20人が参加した。参加者の多くが観測所を間近でみるのは初めて。 「最高水位8.6㍍」の標識を頭をのけぞって見上げた。その高さまで水がやってくることを想像しただけでも、十分に恐怖に感じる。
	【写真説明】 ④矢口水位観測所の水位を測る目盛を見上げる見学者ら 

管理第一課からの意見・感想等	
	１１月のご報告ありがとうございます。 矢口川水門で河川敷が途切れた場所の堤防斜面に、ごみ袋数個が置かれていることですが、大芝出張所の河川巡視や維持業者においてその都度回収しています。また、河川敷に野積みされた刈り取られた雑草の山についても回収処分を行っています。 今後とも、お気づきの点等がございましたら、ご意見を賜りますよう、どうぞよろしくお願いします。